

神戸 Y W C A

夜回り準備会

報告書 vol.12 はらはら



0. はじめに

鍋谷美子

毎回、報告書作りはメンバーそれぞれが何を書きたいか、出し合うところから始まります。年によっては、報告書自体ができるのか危ぶまれることもありました。初めての年間報告書は2004年で、その第一号は震災からそれまでの10年ほどを詰め込んだようなものになり、その後は毎年の報告と、そのときどきの社会状況に合わせたトピックなどをメンバーが寄せるというかたちで続けています。

各原稿についてああだこうだ意見を出し合う過程が、会として大事にしたいことを確認し合う場にもなっていました。このところ夜回り活動自体もぎりぎりのメンバーで行っていて、話し合い、勉強になかなか時間をさけていません。それで本当は原稿をもとにいろいろ議論していき、その中身も含めて載せられたらよかったです。今回の報告書については、それぞれの意見や思いを基本的にはそのまま載せるという形で原稿掲載することにしました。

これはいつもですが、内容についての意見や、これは違うのではないかと、批判、感想など、いただけると嬉しいです。いろいろな立場の人に夜回りのことが届くように、また、自分たちの中でも議論を深める機会として、報告書(づくり)があればと思っています。

目次

0. はじめに
鍋谷美子
1. 1年を振り返って
野々村耀
2. 夜回りでの会話
野々村耀
3. 更生センター・更生援護相談所見学の報告
森脇梓
4. 選択
金本美子
5. 世界を覆う不寛容な空気のなかで
梅澤昌子
6. 「生活保護なめんな」ジャンパー問題から考える
立川献
7. それぞれの感想
メンバー
8. 会計報告 カンパ御礼

1. 1年を振り返って (2015. 8~2016. 7)

野々村耀

1 人数の推移

例年通りの推移の報告です。

() 内は昨年度の数値

期間：2015. 8~2016. 7

	最多	最少	合計	平均
参加者	5 (6)	2 (3)	81(98)	3.4 (4.6)
訪問先	6 (5)	2 (3)	111(98)	4.6 (4.2)
会った人	5 (5)	2 (2)	78(74)	3.3 (3.2)

2 活動のまとめ

これまで、定例活動として、①夜回り ②病院訪問 ③昼回りと区分して報告してきました。①は、神戸市灘区・東灘区の公園、道沿い、川辺、海沿いなどで小屋掛けしたり、露宿したり、廃車の中などで生活している人を訪問し、安否を伺い、交流し、困ったこと（食えなくなった、襲撃された、追い立てられた、その他）が起っていないか、手伝えることがあるか聞き、役に立ちそうな情報があれば伝えるということになります。毎月第二第四土曜に行ってきました。声をかけるきっかけに、温かい（時には冷たい）飲み物（コーヒー、紅茶、緑茶、味噌汁等）を持参し、パ

ンかおにぎりを届けます。カトリックの「交流部屋だより」や神戸の冬を支える会のピラを届けたりもします。出会って話を伺うのは楽しみでもありますが、寒い時期や雨の時は迷惑なので短く切り上げます。

この一年間は、襲撃や追い立ての話は聞きませんでした。寝袋や毛布が盗まれるということがあったのは残念です。

夜回りの時はゆっくりできなかったり、何人もの前では話にくいこともありますから、昼間に改めて訪問し、福祉事務所や病院等と一緒に往ったりします。これが③の昼回りです。②の病院訪問は、退院後に戻る住まいのない人をお見舞いし、退院後について相談したりしますが、16年末からは休んでいます。

また、①②③のほかに毎月第3土曜には④話し合い（ミーティング）をして、今の問題や、事務的なことなどを相談します。

この期間に①-④のほかにおこなったことを簡単に紹介します。

日時	出来事
7月26日	兵庫県野宿者支援懇談会でセクシャルハラスメントについての研修
8月2日	報告書感想会
11月13日	トライやるウィークで(神戸市では中学生

	が商店やカフェなどで社会体験する週間) Y W C A に来た中学生4人に夜回りの話
11月21日	芦屋市上宮川文化センター人権学習会で 夜回りの話
12月13日	越年前二次被害防止研修
12月夜回り	新しい下着などを届けた。
12月28日 ～1月5日	越年活動：炊き出し、各種相談（医療・生 活・法律・よろず）、散髪、追悼 （主催は実行委員会） Y W C A 夜回り準 備会は、炊き出しでカレーを担当した。
1月	知らなかった場所に3人暮らしていると 聞いた
4月18日	年度が変わり、担当者が代わるので神戸市 教育委員会人権教育担当係長へ挨拶（木 村和夫氏）
5月14日	更生センター・更生援護相談所見学
6月12日	報告書感想会
6月22日	Y W C A キックオフミーティング：Y W C A 内の様々なグループとの交流
11月6日	勉強会「神戸でできること」：野宿してい る人にどう声をかけるか、どんな支援がで きるか、どんな施設があるか、生活保護、 それぞれのメリット・デメリットなどの勉 強会

2. 夜回りでの会話

野々村耀

1. はじめに

夜回りで交わした会話を一年の振り返りの中にそのまま入れたいと思ったのですが、編集するときに、余り賛成してもらえませんでした。分かりにくい、もっと整理しないと伝わらないだろう、エッセイ風書き直しては…。結局「どうして、記録そのままを紹介したいのか」を書いたほうがいい、ということになりました。

なぜ、そんな風な書き方をしたかということから始めなければなりません。1983年に横浜寿町周辺でマスコミが「横浜連続浮浪者殺傷事件」と呼んだ事件がありました（寿町は、日本三大寄せ場のひとつとされています）。仕事にあぶれたり働けなくなって、公園で寝ていた日雇い労働者たちを、中学生たちが殺し、怪我をさせるという事件でした。日雇労働者組合の人たちは、「俺たちは「浮浪者」でなく、労働者だ」と抗議しました。新聞などは執拗に中学生たちの動機を探りました。

【参考】・「少年犯罪の事件簿 横浜中学生浮浪者狩り事件」

<http://s.maho.jp/book/2e8648g9f92c5e12/921366001/16/>

・『人間』をさがす旅」（青木悦）まえがき

<http://aokietsu.no.coocan.jp/Top-ningen.htm>

このことが契機で、寿町に関わっている、僕を含めて、日雇い労働者でないものたちが、パトロールをはじめました。日雇い労働者組合から野宿している仲間のために毛布を寄付してほしいという要請を受けて、物資を提供するだけではすまないと考えたのです。当時、日雇労働者でない「市民」は、多くの場合何らかの先入観を持っていました。寿という町に、日雇い労働者に、特に公園などで野宿している人に対して。怖い、危ない、汚い、臭い、やる気がない、怠け者、自由人…。

そして、そのように評価したり、解釈する事に何の疑問も持っていませんでした。そのような大人の（社会の）評価が、子供たちにも継承され、彼らは、「町をきれいにする」ために殺したりできたのです。大人たちは日雇い労働者に対して、野宿する人に対して、仲間だと思うのではなく、見下げたり、非難したり、おそれたりする事をためらいませんでした。また哀れんだり、同情したり。要するに、自分たちの側が、評価したり、解釈したりする権利があるとおもっていました。

事件に衝撃を受けた仲間が、パトロールを始めたのは、「聞く」ためでした。自分たちの価値観や倫理観を押しつけたり、それで断罪したり、評価したり解釈するのではなく、野宿せざるを得ないところまで追いつめられた人と何とか出会い、その人たちの声を聞きたいと思ったからでした。

ですから、パトロールの報告書には、ある一日の記録として、聞いたままを掲載しました。私たちへの非難でも、抗議でも。それを通して、私たちも、読む人も、上からの視線で評価したり、判断したりするのではなく、率直に野宿しているひとに出会いたいと思ったのでした。

今回、夜回りでの会話を、振り返りに加えたいと思ったのもそんな気持ちからでした。だから、うまくまとめたり、わかりやすくしたり・・・そういう解釈を極力少なくしたいと思ったのです。話されたことそのものを通して、何か伝わらないかと。

もちろん、越年とか炊き出しとか、説明した方がいいこともいろいろありますから、それを避ける必要はありませんが、できるだけ聞いたことをそのまま書きたいと思いました。

2. 夜回りでの会話

毎回夜回りでは、飲み物を薦めたりしながら、変わったこと、困ったこと（収入が得られなくなり、飯が食えなくなった、体調、追い立て、襲撃等）がないかたずねたりしますが、それだけでなく、いろいろな話をします。その幾らかを紹介したいと思います。多少季節もわかるように何月かだけ書きます。

なお、以下に登場する人物名は、すべて仮名です。

■小野さん


通りから見えない場所でブルーシートの小屋で暮らしている。小屋まで行きつくのに木や草のしげった場所を通る。行くといつも椅子を出していただきます。

8月	
1回目	先週の花火や暑いこと等他愛のない話。生活保護など話しにくいことも、相談してほしいと話した。コーヒー、パン、蚊取り線香一袋。
2回目	小野さんは時々通り道の草を刈っている。「この夏は乗り切れました。熱中症は気をつけています。」読書中。懐中電灯が明るいので、ライトを変えたかを聞くと、「不燃ゴミの中でLEDライトを見つけたので」とのこと。「今年は神戸は雨が少なかったけれど、湯水の話は聞かないですね。本はまだまだあります」 ※く小野さんと本>病院訪問では、入院している人が退屈しないように、推理小説などを持って行きます。小野さんも本が好きなので、持って行きます。
9月	
1回目	「草刈りに3日かかりました。蚊取線香は粗大ごみから見つけたので、いらないです。台風は

	<p>大丈夫でした。ここは水はけがよいのでテントも無事だった。若い頃はジャズ喫茶によく行きました。夏はボンボンベッドで外で寝たけど、今はテントで寝てます。更生センターの人が月に一度来ます」</p> <p>※<更生センター>については、本報告書に掲載している森脇さんの報告をご覧ください(27p)。センターの職員が野宿している人を訪問しています。</p>
2回目	<p>健康診断のことを話す。心配があれば連絡してほしい。「携帯電話の充電をさせてくれる友人がいる。野宿して十数年になります。西宮からここに来て3年あまり。武庫川河川敷の相談会で何回か健康相談したことがあります。『血圧が高いが、まあ大丈夫』といわれた。本はまだ十分ある」</p> <p>※<健康診断>以前は保健所に行けば健康診断を受けられたが、今はバスが巡回して健診しているので、野宿している人はなかなか受けられません。</p>
10月	
1回目	<p>「メリケンパーク周辺で、インドの催しがあったようです。西宮にいたときは3人一緒だったので、カレーを手作りしたけど、1人は大阪に</p>

	行って連絡が付かなくなった。今はレトルトのカレーを食べてます。
2回目	<p>この日はおにぎりがなく、弁当を買って届けた。「サツマイモが好き」とサツマイモの弁当を選ばれた。「明日から冷え込む」とのこと。「カセットコンロのガスは割に長持ちします。カイロはまだありません。本は芦屋で見つけました」。</p> <p>自転車保険が義務化されたが入ったか聞くと、「住所がないから無理かなあ？住民票は西宮に長くあったが、長く使ってないので、消除されたかもしれません」。</p> <p>※＜自転車保険＞自転車による人身事故が多く、賠償金が多額になってきたので、兵庫県は「保険加入を義務化」した。</p>
11月	
1回目	<p>「本は今年いっぱいは大丈夫」。読み終わった本をいただいた。</p> <p>※この頃より、小野さんから本をもらうようになった。</p>
2回目	「カイロは今年のはある」。牡丹鍋の話。「イノシシは脂っぽく感じる」とのこと。
12月	
1回目	<p>下着セットを届けた。読み終わった本をたくさんいただいた。「必要な人に使ってください」</p>

	<p>と。寒いので、小屋の中に居た。越年に誘ったが「場所が遠いから、行きにくい」。</p> <p>※<下着セット>上に着るものは、ほとんど自分で工面しているが、下着は案外手に入れにくいので、新年を気持ちよく迎えられたらと、下着などを届けます。「いらない」という人もいます。</p> <p>※<越年>元々は、寄せ場（日雇い労働者の街大阪の釜ヶ崎・東京の山谷・横浜の寿など）で、仕事がなく、役所も閉まってしまう年末年始に、生き延びようと、労働者が支え合う越年活動。神戸でも、95年の末から毎年、炊き出しや、生活相談、法律相談、医療相談、音楽などを続けている。</p>
2回目	「今年読んだ本では東野圭吾がよかった。越年には行かない。強風だが小屋は大丈夫だった」
1月	
1回目	パンなど渡す。寒いので椅子に座るのは遠慮し、立ち話し。「柳原の恵比寿さんに行ってきた。恵比寿さんは関西のイベントですね」とのこと。
2回目	「お湯を沸かすときだけストーブをつける」。 S M A Pの話。
2月	

1 回目	<p>「お茶がいい。暖かくなれば、ジャズが聞けます」と楽しみにしている。「この冬は風を引いていません」。</p> <p>※＜ジャズ＞神戸は古くからジャズが盛んで、コンサートも多い、屋外（路上や公園）での無料の演奏もよくある。</p> 
3 月	
1 回目	「夜は寒い」。ジャズデーのチラシを渡す。古物商の人にもらった紙袋をいただく。古本もその人からもらうとのこと。
2 回目	バレンタインデーの後 Y W C A に寄贈されたチョコ、おにぎりなど。「ジャズが楽しみ」。
5 月	
1 回目	<p>「新開地音楽祭に行った。あるバンドのドラマーが、アマチュアのレベルを超えている。まもなくメジャーデビューするんじゃないか？ トランペットがよかった。明日は神戸祭りがあるけど、人が多いので、テレビで見ようと思っています」「最近は中学生の襲撃はありません」。</p>

	<p>「湊川（公園）にも時々行く。将棋をしているが、自分はしない」。夾竹桃がのびている。</p> <p>※くテレビ＞携帯のワンセグ放送</p> <p>※く将棋＞好きな人が公園で持ち寄った将棋盤で勝負している。</p>
2回目	<p>ラジオで巨人阪神戦を聞いている。「阪神は負けてたけど逆転した。日が長くなってきたので7時前まで本が読めます」。</p>
6月	
1回目	<p>パン等届ける。ラジオを聴いていた。「瀬田さんは動けないので、私が代理で病院に薬をもらいに行っています」本をもらった。</p> <p>※く瀬田さん＞以前は隣のテントで暮らしていた。仕事中に倒れて入院した経過などを報告書 vol.8 の7pで紹介しました。今は生活保護を受けて暮らしています。</p>
2回目	<p>「瀬田さんは介護保険の手続きをしました」</p>
7月	
1回目	<p>「ジャズイベントが終わったので、次は花火かな。瀬田さんは介護保険で週一回、風呂のサービスを受けるようになった（施設から車で迎えにきてくれる）。自分では銭湯に行けない」</p>
2回目	<p>芦屋の花火の日。花火見物の車で渋滞がひどいので、遅くなると電話した。一緒に花火見物し</p>

	た。最後が圧巻だった。この時期に海で亡くなった、キリンの好きだった菊池さんのことをおもいだす（報告書 vol.10 参照）。
8月	
1回目	「ボンボンベッドに寝て夜空を見たけど、流星群は見れなかった」。

■石田さん

ある公園。生まれたばかりの捨てられた子猫に猫用の哺乳瓶で授乳（3時間おきに起きて）したり、動物駆除に怒ったり。訪ねてくる知人が多い。警備の仕事に行くことがある。ラジオで漢詩を聞いている。

8月	
1回目	<p>一度訪ねたが留守だったので帰りにもう一度寄る。やはり猫の餌やりに行っていた。今日の仕事は摂津本山だった。その後ワコーレの現場。そこからコンビニの系列の話</p> <p>※く仕事>警備の仕事、工事現場の誘導など。仕事はあたりなかつたり。</p>
9月	



1 回目	競技場でアメフトをやっている、明るくにぎやか。「今日は仕事に行った。明日は摩耶埠頭。昨日は割塚だった。ブタオ（猪）がきた」「興奮するからライトで照らすな」と注意された。
10月	
1 回目	「今は肺炎と喘息だが、病院にはいかない。改源は欲しい」。イノシシの駆除に怒っている。
2 回目	今週は心齋橋大丸の仕事。「働くと金がかかる」。なぜと聞くと「交通費は自腹やし、つきあいにカネがいる」。「ここだと人脈があるから、金がないといえはおごってくれる仲間がいる」。

■ 杉山さん

夜は公園のベンチにいる、雨のときは少し離れた川沿いの電車の高架下に移る。ラジオをよく聞いている。シーズン中は野球の話をする事が多い。

8月	
1 回目	ベンチで阪神戦のラジオを聞いていた。勝っているので嬉しそう。髪が伸びているので暑くないか聞くと、「暑い」とのこと、切りますよと話した。
2 回目	カトリックの散髪 <small>カトリックの散髪</small> の紹介。次回サボ <small>サボ</small> を持ってきてみる。「今は物をとられない」。

	<p>※くカトリックの散髪＞カトリック教会は震災後、教会も壊れたが、敷地内に「交流部屋」を作り、相談、シャワー、洗濯、物資提供等をしている。教会内で炊き出しもしていたが、地域の反対でできなくなり、いまは小野浜公園というところで週に3回炊き出しをしている。</p> <p>※サボ＝散髪道具のこと。</p>
9月	
1回目	<p>髪を切っていた。ほぼ丸坊主。洋服も替わっていた。ある人からはさみをもらって、自分で散髪したとのこと。「最近は嫌がらせはない。寝袋がなくなった」。</p> <p>※く寝袋＞毛布、段ボール、新聞紙でも、体温を保つためのものは、それが無い時には、命に関わります。</p>
2回目	<p>涼しくなったので寝袋を届けた。次回は暖かい服を持って行きたい。</p>
10月	
1回目	<p>「毛布を盗まれた」</p>
2回目	<p>靴を渡す。サイズはちょうどよかった。笑顔。（足が大きいので、合う靴がなかなか手に入らない。）</p>
11月	
1回目	<p>雨なので、高架下に移動していた。</p>

1 2 月	
1 回目	下着セットなどわたす。ビラにマイナンバーのことが書いてあるので、住民票のことを聞いた。「箕面にある。九州から出てきて最初に箕面に住んで新聞配達をした。会社の借りたアパートに住んでいた」
2 回目	「公園にアカペラの練習に来る人がいる。九時頃帰るかな。強風は大丈夫だった」
3 月	
1 回目	「眠るのは1 2 時か1 時頃、起きるのは夜明け」
2 回目	かまいたち（関西の芸人）の大喜利の話。甲子園の話。
4 月	
1 回目	雨なので「屋根のあるところ」で出会う。「変わったことはない。鞆はいつものところにおいてある」 ※<屋根のあるところ>屋根のないところで寝ている人は、雨の日は雨を避けられる場所に移動する。持ち物を運ぶのは簡単ではない。
5 月	
1 回目	ラジオで野球を聴いている。「阪神ファンになったきっかけは3 0 年以上前の江川事件だった。どうしても江川をほしい巨人が、巨人の小

	<p>林繁投手を阪神に移籍させ、阪神に入団が決まっていた江川を奪い取った。小学生だったが、この事件をきっかけに阪神を応援しようと決意した。20歳の時関西に来て、25年。今も阪神を応援している。(パではオリックスが好き)」</p>
2回目	<p>「阪神が最後に優勝したのは30年前、自分はまだ地元にあった。周りに誰も阪神ファンがいなかったが、自分は阪神ファンだと公言していた」。道頓堀のカーネルサンダースの話など。靴がだめになった。</p>
6月	
1回目	<p>靴を届ける。サイズは丁度よい。ラジオを聞いていた。</p>
2回目	<p>雨、高架下やいつものベンチにもいない。念のため公園の奥の東屋に行くと「あ、来た」と驚いて笑っていた。「夕方までベンチにいたが、降ってきたので東屋に避難した」、とのこと。阪神は「負けました」</p>
7月	
1回目	<p>阪神戦を聞いている。「今期はダメだった」。ラ</p>



	イターがつかないので、蚊取り線香に点火できない。「飲み物は夏は冷たい方がいい」。
--	--

☆岡田さん、上原さん、石野さんについて

1月頃、**巡回相談員**から、ある場所に、廃車が4台あって、3人の人が住んでいると教えてもらった。

〈巡回相談員〉神戸市の『ホームレス』対策のための職員。



■上原さん

廃車に住んでいる。最近夜回りに行くようになった人。

1月	
1回目	ワイパーにビラを挟む。
3月	
1回目	初めて会う。名前を教えてもらった。「月の半分位コインパーキングを作る仕事に行っている。炊き出しに行ったことはある。更生で下着をもらうことがある」。
2回目	「仕事で姫路まで行く」。何かあった時のために連絡先を書いた紙を渡す。
4月	
1回目	「住民票を作りたい」とのこと。やり方を調べおくと約束した。「故郷は九州。市内の弟のと

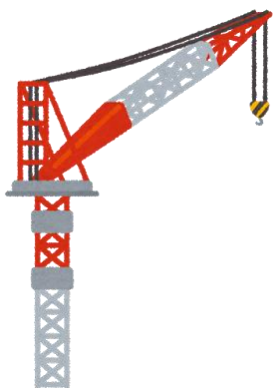
	<p>ころに、住所をおこうと思う」。暑いので車のドアを開け放っている。「以前大石でたこ焼き屋をやっていたが、許可がないのでやめるように言われた。震災時は仮枠大工をしていた。仮設住宅にいたが、年齢が若いので、復興住宅に入れてもらえなかった。「朝早く台車を押して、夜に帰ってくる人がいる」。「車の車検は切れているがエンジンはかかるので、電気は使える」</p>
2回目	<p>住民票は生活保護申請の為。住民票が無くても申請できることを説明し、手伝える、と話した。「数年前に兵庫区役所に相談したら、『仕事を探して働きなさい、でなければ病気の診断書をもってきなさい』と言われ、10回くらい断られた」。生活保護は今は申請しやすくなったことを話した。手続きの案内を作ることを検討したい。「兄のところに免許証の住所を置いている。弟は市内で保護を受けている」</p>
5月	
1回目	留守。パンとピラを自転車のかごに入れた。
7月	
1回目	留守。

■岡田さん

同じく廃車に住んでいる。

4月	
1回目	「左官だが、仕事が少ない。丈夫がとりにえだから、仕事ができる間はがんばる」。「炊き出しなどには行ったことはない」。→秋には炊き出しに行くことになる。それだけ厳しいのだろう。「車はここでエンストした。もう動かないだろう」
2回目	仕事がなかったらしく、おにぎりの差し入れを喜んでもらった。次回に、生活保護のことを提案しよう。
5月	
1回目	「ずっと仕事はない」。生活保護を受けたければ手伝うと話した。ビラなどを渡し、カトリックや小野浜の説明をした。「何とか自分でやっ ていこうと思うんやけどなあ」と言われるので倒れる前に相談してほしいと話した。今は移動は徒歩。「神戸に50年住んでいるから(カトリック教会のある)北野坂のあたりはよく知っている。仕事にも行った。(相談するときは)よろしく」
6月	
1回目	「仕事はない。友達に『東京にはあるらしい』と聞いたが、ピンハネもひどいらしい。でも、がんばります」

2回目	<p>「バブルの頃は日給3万円だった。学校の渡り廊下の工事現場に行って、次の日にみると、渡り廊下は落ちていた。6階建ての建物の現場に行くと『人が落ちて、気を失っている。確認して』と言われた、見ると死んでいた。クレーンのある工事現場で、下が土なので『危ないなあ』と思っていたら、翌日クレーンが倒れていた。神戸港に沖仲仕（おきなかし）がいたころ、屋台がいっぱいあって、片方だけの靴などを売っていたりした。ぼくちも少しした。周りにはヒロポンをやりながら仕事する人もいた。自分はやらなかった」</p>
7月	
1回目	<p>「他の廃車の人とはあまり付き合いがない」。「昔は手に職があれば食っていけたが、今は技術がすぐに廃れるから食っていけない」</p>
2回目	<p>外で話す。「軽（自動車）の車検はどれくらいかかるだろう？」と訊かれた。隣の酒井さんが寝ている車の車検を受けたいとのこと。「船も検査がある」という話。「昔、芦屋に3年ほど住ん</p>



	<p>でいた。南の方。芦屋も北は六麓荘等すごい金持ちエリア。坂がすごく、自分は自転車でヒーヒー言うが、電動自転車的人是うすいすい上っていく」。飲み物は熱いのと冷たいのとどちらがいいか訊くと、ほっとするから熱い方がいいとのこと。</p>
--	---

■酒井さん


一度だけ話してくれたが、次からは何もいらない、と断られている。

1月	
1回目	声をかけ自己紹介。ビラは受け取ってもらえた。炊き出しは、恥ずかしいから死んでも行かない。仕事は粗大ゴミ回収。
2回目	何もいらないと、話ができないでいます。

■林さん

壊れかけの自転車に大事なものを満載にして、押して歩いている。移動中に会うので、会えたり会えなかったり。

3月	
1回目	ベンチで寝ている。「三宮では自転車がすぐに撤去される。11時頃までここにいて、自転車をおいて三宮に行き、朝5時半頃ここに戻る」。
2回目	チョコ、おにぎりなど。「ロシア出身のユルブリ

	ンナーという俳優の話。女性の下着を集めて捕まるといふ映画があつた。「病気には気をつけている」。私たちが立ち去るのを、立ち上がつてお辞儀して見送つてくれた。
4月	
1回目	公園には花見客がいるので、少し離れたところで話す。「公園の通路に自転車をおいて三宮にゆく」。「時々毛布などをくれるという人がいるが荷物を運びきれないので断つている」。「今は桜の花びらが散るので公園の掃除をしている」
5月	
1回目	<p>「三宮では（寝ていると）通報される度に警察が注意をしにくる。でもパン（林さん曰く「ご褒美」）をくれるときがある。マクドをくれる人もいる。昼間は○ ○川にすることが多い、ほかに寝ている人は見かけない」。炊き出しの話をするとき「あんなところには行きたくない」とのこと。</p> 
2回目	××川の橋の上の石のイスに腰掛けてはつた。「ネットをかぶつて寝るので蚊取り線香はい

	<p>らない。「今日の昼間は〇〇川の公園で植木の手入れをしていた。昔東京で植木職人の手伝いをしたことがある」。雨の時はどこにいるの？</p> <p>「屋根のあるところ（公園の東屋）は子供が遊んでいたから。合羽と傘で過ごした」。別れ際、立ち上がってお辞儀された。</p>
6月	
1回目	<p>襲撃の話。「三宮や神戸駅でエアガンで撃たれたり、石を投げられたことがある。段ボールで寝ていると蹴飛ばされたりするので、地べたにじかに寝る。表通りだとすぐ通報されるので、裏通りで寝るが、人がいないと危ない」。今日も見送ってもらった。</p>
7月	
1回目	<p>ミルクなしコーヒー。「味噌汁は飲まない。飲み物は夏でも熱い方がいい」。自転車は壊れそう。</p>
8月	
1回目	<p>去年は歩いていてエアガンで撃たれたり、自転車の荷物に花火で放火されたりしたが、今年はなかった。</p>

3. 更生センター・更生援護相談所見学の報告

森 脇 梓

1. はじめに

JR 灘駅の近くにある神戸市立更生センター・更生援護相談所という施設を皆さんはご存じでしょうか。神戸市立更生センターは、「身体上又は精神上の理由により養護及び生活指導を必要とする要保護者を入所させて、生活扶助を行うことを目的とする」（更生センターパンフレットより）施設であり、生活保護法に基づいて設置されています。更生援護相談所は、社会福祉法に基づいて設立された、一時宿泊所です。同施設の職員は、定期的に神戸市内で野宿をしている方の巡回相談を実施しています。

野宿している方の支援を行う夜回りの活動と密接な関係がある施設ですが、実際に行ったことはないというメンバーが複数いたので、改めてどのようなところなのかを知るため、2016年5月14日に見学してきました。案内をしてくださった職員の方に、この場を借りてお礼を申し上げます。

更生センターと更生援護相談所は3階建ての同じ建物の中にあり、1階の一部が更生援護相談所、3階が更生センター、2階が共用の相談所などになっています。見学当日は、更生センターの娯楽室・浴室・食堂・居室・屋上、更

生援護相談所の宿泊室・シャワー室を見学させていただき、最後に職員の方にお話を伺いました。見学後、メンバーからは「最低限の施設だと感じた」「JRの線路が近いので、音がして落ち着かないのではないか」「神戸市はこのような施設をなくそうとしているのでは」などといった声が聞かれました。

以下、見学したときの様子をレポートします。なお、関連施設として、宿泊施設である兵庫荘（神戸市立）と磯上荘（神戸市社会福祉協議会）についても言及しています。

2. 各施設の紹介

①更生センター

〈センターについて〉

- ・定員 50 名で現在の入所者は 29 名。職員は 19 名（更生援護相談所と兼務）。嘱託の看護師は水・土以外出勤。
- ・昭和 29 年にできたが、設置当時は周辺住民とかなりもめたそう。
- ・阪神大震災のときは避難所として利用された。

〈施設の様子〉

- ・昼間は居室に布団は敷かない。布団を敷きっぱなしにしていると生活が怠惰になってしまうので、毛布のみにしているとのこと。見学したとき、横になっている人がいた。
- ・娯楽室ではみんなでテレビを観ていた。

- ・入浴は週3日(火・木・土)。その他、作業訓練の日は入浴できるようにしている。

- ・食事は業者が交替で2人で手作りしている。管理栄養士が監修。居室への持ち込みはできない。食べたらずくに食堂を出る人がほとんどで、食堂での会話はあまりない。テレビがあるが、ほとんどつけない。

- ・屋上では各自の洗濯物が干せるスペースがある。

〈施設での生活〉

- ・衣食住に必要な物は全て現物によって給付される。本人が自由に使うことができる現金は月2000円(昔は現金ではなく、たばこなどだった)。

- ・施設外で働いて収入がある人については、諸費用がかかるので、その収入の中から8000円まで持てることになっている。

- ・嘱託医による医療相談は月・木に行っている。

- ・年間でいろいろな行事があり、今月はハイキング。

- ・施設内で行う作業は納期のない仕事(シール貼りなど)。仕事の量は少なくなっている。施設外での清掃作業等もある。作業賃の4割は強制的に貯金し、退所時にまとめて本人に渡すことになる。

〈入所者について〉

- ・未成年は基本的に不可。最低でも18歳以上。比較的若い

入所者も見られた。

- ・入所者同士のトラブルはそれほど多くない。
- ・退所後は居宅で生活保護を受ける、居宅で就労する、その他の施設へ入所するの3つが基本となる。
- ・病院から更生へ来る人もいる。
- ・野宿経験のない入所者が多く、ケースワーカーがその相談にあたる。
- ・ずっと住み続ける場所ではない。短い人で3か月、長い人で2～3年の入所もある。
- ・就労意欲がなく、2～3年入所していた人が就労し、仕事をやめずに続けているというケースもある。
- ・更生センターから通える仕事を勧める。できれば正社員がいいが、長く続けられるならアルバイトでもいいが、派遣は不安定なので避けるように言っているそう。
- ・給料は施設が基本的に管理している。
- ・部屋探しは入所者自身が行う。生活力をつけてもらいたいと考えている。
- ・退所後の追跡調査は行っていない。何度も戻ってくる人もいるが拒まない。

② 更生援護相談所

- ・生活保護を受けていたり、年金を受給している場合（他に生活手段がある場合）には、本施設を利用できない。また、男性しか利用できない。

- ・神戸市で野宿している人がいたら、まずは、更生センターが相談窓口になる（注：現在は生活困窮者自立支援法などで使える他の施策の運用もある）。
- ・定員 80 名で、現在は 30 名前後が宿泊。
- ・宿泊は 1 泊単位で、基本は夜のみ利用できる。体調が悪い人等は昼間も滞在できるようにしている。
- ・酒類の持ち込みは禁止。トラブルのもとになるので、飲酒している人は入れない。
- ・インフルエンザなどの感染症にかかった場合は、更生センターの居室で隔離することも。
- ・入浴は予約制。

③ 関連施設

- ・兵庫荘、磯上荘はもともと低賃金の労働者のために用意された、低家賃の施設であるため、利用者は就労していることが前提。就労の証明が必要となる。
- ・磯上荘は今年度（2017 年 2 月末）で廃止。生活困窮者自立支援法によって、利用者が減ると見込まれたため。新規の入所者が少なく、長期の入所者が多かった。
- ・更生センターは男性しか入所できない。女性で野宿している人向けの施設はなく、警察や福祉事務所を通して兵庫県立女性家庭センターなどが対応することになる。施設では、DV 被害者の人も利用するため、居所を知られないよう、外との接触を禁じている。外出には職員が同行。入所に収

入は問われない。

【参考】

・ 神戸市立 更生センター・更生援護相談所
神戸市中央区割塚通 1 丁目 2-20

・ 神戸市立 兵庫荘
神戸市兵庫区浜中町 1 丁目 17-9

・ 神戸市社会福祉協議会 磯上荘
神戸市中央区磯上通 2 丁目 2-32

* 2004 年度神戸 YWCA 夜回り準備会活動報告書 vol.1 p26
「コラム⑥ 更生センター・更生援護相談所」、「コラム
⑦ 神戸市の低家賃施設について」も参照してください。

4. 選択

金本美子

■天王寺公園通路の夜間閉鎖について

(1)

2016年10月4日から、大阪の天王寺公園の「大阪市 天王寺区」で終日解放していた通路の夜間閉鎖が始まりました。

公園内の通路の長さ約370メートルの柵を撤去するなどの改修工事を行うとのことで、市は柵を撤去した後も夜間に通路に出入りが出来るようにしておくことと防犯上の問題があるとして、午後10時から午前7時まで門扉を閉めることにしました。

その年の夏ごろまで、夜間20～30人ほど、野宿をされている方たちがいたそうですが、閉鎖の為に、利用できなくなってしまいました。

公園を夜間に閉鎖することで、大阪市の言うとおりに、防犯上の問題が解決したとしても、夜間に公園を利用する事情があった方たちを結果的に排除している問題があります。

夜回り準備会で訪問した、神戸で野宿をされている方たちは、「働きたいから、自分の力で頑張りたいから、生活保護は受けない」「以前に生活保護を申請に行ったが、10回

以上断られた」など、様々な理由で野宿をされています。働きながら生活保護を受けることは出来ますし、生活保護を断られることがあってはいけないのに何度も断られて、野宿をされています。ですので、本人の意思で野宿をされていますが、それを選択するとき、生活保護受給者への差別や、生活保護制度の情報不足、福祉事務所などでの不当な扱いなどが重なって、「体調が悪い」「何日も何も食べていない」「困っている」と言えなくなっている、自分は福祉を受けられないと思い込んで、野宿をせざるをえない方がおられます。

天王寺公園で野宿をされている方とお会いしたことはありませんし、野宿を選んだ理由はわかりませんが、物理的に野宿の方を排除したところで根本的な解決にならないことは確かです。

(2)

公園を閉鎖することにより、少数ですが、排除されているにもかかわらず、観光客がたくさん利用するから、防犯対策を優先しようというのは、ひどいと思います。もちろん観光客の方に、「大阪に観光に来てよかった」と思ってもらいたいですが、それでも、排除はひどいと思います。多数派の意見＝正論、正義、優先すべきことではないはずですが、でも、私も含めてですが、社会全体において、自分の意見は間違っていない、正しいから自分の意見は通るといような、利己的な雰囲気を感じます。物事を自分の思う

善悪で判断することも、自分のことを信じることも必要だけど、他の人を攻撃したり、排除したりする結果になってしまわないか、少し立ち止まって考えていきたいと思います。

■大阪市の中学校校長のある発言について

(1)

「女性にとって最も大切なことは、子供を2人以上産むことです」という大阪市の中学校長の発言が波紋を呼んでいます。

私の意見で、申し訳ありませんが、人口減少は自然現象だと思います。動物行動学では、動物は環境に応じて増えたり減ったりするらしいのです。日本は戦中から戦後にかけて、自然環境とは無関係に人口が激減してしまいました。そして、1940年代の第一次ベビーブーム、1970年代の第二次ベビーブームで激増しました。ですので、現在は、自然な人口減少が起こっていると思います。地球への負担というか、食料や資源には限りがありますので、人口は増減を繰り返すのがいいと思います。

(2) 私の場合

子供のころは、漠然と「大人になったら、子供が欲しい」と思っていました。しかし、私の収入では一人暮らしがやっとです。職場結婚をすると、男性の収入も、女性職員より数万多い程度なので、共働きでやっとでしょう(同じ仕事

なのに、収入に男女差があるのは、不満ですが…。もし、子供を授かって、産休はとれないので、仕事を退職することになり、生活は困窮します。結婚をして、夫婦共働きで、定年まで働いても、残業が増えるばかりで、賞与はあったり、なかったり、昇給もほとんどない状態が続くでしょう。ですから、子供を進学させることはおつかしいと思います。よって、子供を持つということは、私の身の丈には合わないのです。非正規雇用が40%をこえるご時世ですから、フルタイムで働き続けても、生活水準をあげられないのは、自分の力不足だとか、努力不足だとは思いません。それに、自分の職場だけ、特別にしんどいのだとも思いません。もちろん、「私の選択は正しい」とも思っていません。あくまでも、選択の一つで、選択は自由です。それに、「子供を進学させるのがおつかしい＝子供を望んではいけない」ではありません。非正規雇用で、産休の前例がない職場で働きつつ、結婚し、子供を授かり、産み、育てている友人、知人を私は尊敬しています。独身でも、既婚でも、子供がいてもいなくても、生き方を否定されない社会になってほしいなあと願います。

(3) 校長先生の問題発言の原因

校長の発言の原因は、日本の国家予算が、人口が増え続ける前提で考えていることにより、少子化を社会問題として、「少子化は問題だ、女性は子供を産むべきだ」という概

念？偏見を作ってしまったからだと思います。

百歩譲って、少子化が問題だとしましょう。それでも、女性は子供を産む道具ではなく、人間なのです。当然、子供がいる人生、子供がいない人生を考える権利は、女性とパートナーにあります。そして、妊娠、出産は病気ではありませんが、命がかかっているのです。

自分の命について、人にとやかく言われる筋合いはありません。

校長の発言に関してなされたアンケートがあります。その結果は、以下のとおりです。

「みんなの声 「女性は子どもを2人以上産むこと」発言、どう思う？」

<https://vote.smt.docomo.ne.jp/news/society/result/106269>

1位 不快に感じる

8965票

2位 内容には納得できるが、教師の立場から、私見を言うべきではないと思う。

7450票

3位 納得できる

2280票

4位 興味がない



2068票

5位 その他

709票

「内容には納得できるが、教師の立場から、私見を言うべきではないと思う。」との意見に投票した7450名の方も、納得しないでいただきたいと思います。

(4) 問題発言の何がいけないのか？

自分の価値観というか、持論は良識で正義だと思い込んでいる、自分たちと同じ考えでない人を問題視、否定しようとしており、それは偏見だから問題なのです。

■まとめ

野宿をされている方の「働きたい」とか、「福祉事務所で、生活保護の申請を断られて、どうしたらいいかわからなかった」という気持ちは、間違っていないと思います。(天王寺公園で野宿されている方の発言ではありませんが。。。)なのに、「防犯対策のため」という多数派の意見で、公園からの排除が行われてしまいました。

私の「自分は生活が苦しくてもかまわないが、自分の子供には不自由させたくない、進学させてあげたい、惨めな思いをさせたくない」とか、「働きながら、子供を育てている友人を尊敬する気持ち」とか、間違っていないと思います。しかし「少子化は問題だ」という概念？の為に、校長

の「女性にとって、最も大事なことは子供を2人以上産む事です」などという発言が、公然と行われました。

「自分の意見は多数派だから、正しい」とか、「自分は良識を持っているから、自分と同じでないのは問題だ」とか、人を否定して自分を正当化しようとするのは控えめにし、社会に関心を持っていただけると、不必要に傷つけられる、排除される人が減ると思いますので、よろしく願いいたします。

5. 世界を覆う不寛容な空気のなかで

梅澤 昌子

春から夏にかけて仕事の為に東南アジアの大都市にしばらく住み、日本に帰ってきた秋に初めて読んだマンガは、夜回りで訪れた東灘区の男性からもらった、本宮ひろ志のホームレスマンガ「まだ生きている」だった。本宮ひろ志といえば、中学校では、理解ある担任の先生の許可の下で「俺の空」が「学級文庫」に入っていたし、「サラリーマン金太郎」はベストセラー。「国が燃える」で南京大虐殺を描き問題になって、筆を折ったものと勝手に思い込んでいたら、こんなところで、なんとなんと、リストラサラリーマンのホームレスマンガを描いている！あの、オンナと金と。。みたいな、男の夢みたいなことばかり描いてた人が。。というようなことを、男性の質素な住まいの外にある、読書用のテーブルの上に置かれた「まだ生きてる」の表紙をランタンの灯を頼りに凝視しつつ、ちょっと口にしたら、「よかったらどうぞ。持って帰ってください」と、男性。そして何か考えているように少し黙られたあと、口を開いて、「前半は辛い話が続くけど、後半、ああよかったな、という風に終わります」と、いつものように穏やかな声で続けられた。

ありがたく本を抱えて帰宅し、翌日一気読み。「前半は辛いけど、後半は、ああ、よかった」に納得。男性は本が好

きな方で、普段はマンガではなく、日本の小説を主に読んでおられる。西村京太郎、東野圭吾、etc. 読み終わった本はわたしたちに寄贈してくださるので、夜回りグループのベースがある YWCA 分室の2階の本棚は、いまや男性の名前を冠した文庫をオープンできそうな勢いで本が増え続けている。物語に日頃から親しんでいる人だからこそ、ああいう風にシンプルに、わたしがストーリーを楽しめるように、ネタバレにならないように気を使って言ってくれたんだろう、と想像した。たぶん、この想像はあたっている。



夜回りグループに参加するまでは、こんな風に本をもらうなんて、想像もしなかった。家も何も持っていない人だから、こちらから何かあげることはあっても、相手からももらうなんて、ありえない。そんな意識でいたように思

う。また、今から思うと、「偏見」とまでは言わないにしても、彼らをどこか「特別」「自分とは違う」と考えていたところもあった。約二年前、「ドライバー募集」の声に手を挙げて、夜回りグループに加わったばかりの頃、一番驚いたのは、出会う人たちがみな「わりに普通」で、近所の人と交わすような話をされること。ジャズ。神戸のイベント。仕事のこと。好きな球団。「こんな普通の人たちがどうしてこんなことに！」と頭を抱えるわたしに「誰も自分がこんなことになるなんて思ってなかったと思うよ」と、夜回りの仲間が諭してくれた。こう書いていても、自分の無知と不勉強が恥ずかしい。

こういう支援活動に関わると一発でわかるし、逆にいえばそうでない人にはなかなか伝わりにくいことなのだが、「支援する側」と「支援を受ける側」の立つ位置は、一般的なイメージよりずっと近い。「支援を受ける側」の人たちは、「わたしたちとは違う」わけではない。いや、正確に言うと、わたしたちがひとりひとり違うように、彼らとわたしが違うが、わたしたちが人間として同じであるように、彼らとわたしたちは同じだ。しかし、どういうわけか、この便利で近代的で、ほとんどすべてのものが金で買えてしまう高度な資本主義社会で暮らしていると、そこから少しはみ出た「支援の受益者」は、まるで「他者」であるかのように、わたしたちは認識してしまう。

日本に帰る少し前、同じ職場の邦人職員から、「日本では、貧困女子高生バッシングが起きてるのよ」と聞いた。NHK の子供の貧困特集でとりあげられた女子高生へのネットでのバッシングがおさまらない、政治家までがツイッターで女子高生を攻撃している、と言う。帰国して、あらためて関連記事を読み、NHK の報道の仕方に難があったらしいということもわかったけれど、それよりなにより、「貧しいはずなのに、1000 円以上のランチや映画や舞台鑑賞などの贅沢をしている」をことが攻撃の理由になっているという点に驚いた。つまり、「貧乏人は贅沢するな」ということなのだが、バッシングする人たちは、自分自身が辛い事、困難なことがあったとき、本や音楽、コンサートや友人との食事、そういった何かしらの「贅沢」で、救われた気持ちになったことはないのだろうか。「貧しいからこそ、困難なことがあるからこそ、楽しみが大きな意味を持ってくる」という発想はないのだろうか。先に書いたように、わたし自身も夜回り活動を始めの前はややわかっていなかったもので、偉そうなことは言えないのだが、この日本全国に蔓延する不寛容な空気。「支援を受ける側」「生活保護を受ける側」を「自分とは違う他者」と認識し、たとえ相手が女子高生であっても攻撃するネット社会の人々。なんとかならないものだろうか。トランプ大統領が誕生したアメリカでは、移民やマイノリティに対する嫌がらせや攻撃が相次い

でいるという。日本では表面上は静かだけれども、ネット上での言葉による攻撃は凄まじく、いずれはアメリカのような状況になってしまうのではないかと恐怖すら覚える。

しかし、一方で、現実の世界で会う人々は、生活保護受給者に同情的ではない友人知人はいるし、わたしが関わっている国連やNGOの活動に否定的で、真っ向から反対意見を述べてくれる親切な(?)友人もいるものの、ネットで見るようなあからさまな攻撃をする人は皆無だ。そしてわたしは、自分の体験から、ますます「支援を受ける側も同じ人間」だという認識を強くしているし、困難な状況において、楽しみを見つけ、大切にし、未来への希望と、社会との接点を失わない彼らを尊敬している。タイのバンコクで出会ったパキスタン人の難民一家は、厳しい生活のなか、わたしを自宅に招いて夕食をご馳走してくれた。ケニアにある世界最大のアフリカ難民キャンプで働いていた日本人男性が、任地を去る時、一番高価な饞別をくれたのは、難民の「友達」だったと言う。どっちが支援している側なのか、支援されている側なのかかわからないが、これは全然珍しい例ではなく、わたしのまわりではごく普通に聞かれる話だ。

国際大学グローバル・コミュニケーション・センターの山口氏の調査(ビデオニュースドットコム:マル激トーク・オン・ディマンド 第825回(2017年1月28日)「日本でネット炎上が後を絶たない理由が見えてきた

<http://www.videonews.com/marugeki-talk/825/>)によると、バッシングに参加しているのは、ネットユーザーのごくごく一部、たったの0.5%にすぎない、という。また、炎上参加者には男性の方が女性より多く、若年層の方が年配者よりも多く、子供がいる人の方がいない人よりも多く、年収が高い人の方が低い人よりも多いという属性があることがわかったという。収入が多い男性、年配者。なるほど、こう言っでは申し訳ないが、それなら、貧しい女子高生の状況を理解し、共感するのは難しいのかもしれない。

貧困の定義付けは難しい。つまり、どこから「貧困」なのか、線を引くのは困難だ。NHKの報道が問題になったのもそれが理由だ。しかし、しかたないことなのかもしれないが、この調査があぶり出す、バッシングをする層 — おそらくは家庭生活も充実した、時間にも経済的にも余裕がある中年以上の男性 — の「心」や「想像力」は十分、「貧困」状態にあると言えるのではないか。わたしたちにできることは、そんなネット上や報道での炎上やらバッシングやらの現象に惑わされず、そんな心の貧しい人たちの言葉に動かされず、自分なりのやり方で、建設的な解決方法を探る

ことだ。そして、できれば、そのベースになる認識として、「違うけれど同じ」であることは知っていてほしい。本を読み、好きな球団の勝敗に一喜一憂し、仕事を探し、神戸の海と山を気に入っている。わたしたちは違うけど、「同じ」なのだ。



6. 「生活保護なめんな」ジャンパー問題から考 える

立 川 献

1. はじめに

1月17日、「HOGO NAMENNNA」（生活保護なめんな）との文字がプリントされたジャンパーを自治体職員が着用していた問題が報道されました。

テレビを中心とした報道においては、基本的には「そのようなジャンパーを着用すべきでない」「不適切である」といった取り上げられ方をしていたように思います。しかし、個人のブログ、Twitter、Face Book 等においては、必ずしもテレビ報道と同様の意見が述べられていたわけではなく、むしろ正反対の意見を目にするのが多かったように見受けられました。

野宿をしている方への夜回りに参加し、多少なりとも貧困の問題、生活保護の問題等と向き合っている私にとっては、この「生活保護なめんな」ジャンパー問題はかなり気になる問題です。ただ、直感的には、「そんなジャンパーを着用するなんてけしからん」「許されない」と思いつつも、そもそも何故そのようなジャンパーを市職員が着用することになったのか、ジャンパーには何が書か

れていたのか、ジャンパー問題は具体的に何がどのように「問題」であるのか、この件を通して色々と考えてみる必要があるように感じました。

夜回り準備会の仲間と、ほんの短い時間、この問題について意見交換をしました。私としては、「結局、なんだかんだありつつも、ジャンパーナンテダメダヨー」という単純な意見をまとめるため、自分に都合の良い意見がある程度収集することができれば良いかなーというような軽い気持ちでみんなに意見を求めたのですが、私自身が持たない様々な視点から、多種多様な意見が出るわ出るわ。軽い気持ち踏み込んではいけない、奥深い問題なのではないか…ということがわかりました。

私自身、結局どのように考えるべきか、というところまでは考え抜くことができていません。ただ、客観的な情報や、色々な考え方に言及しつつ、どのように考えるべきか、思考を巡らせたことを一度文章にしておくことも、意義のある試みではないかと思い、原稿にすることを決めました。

2. ジャンパーに記載されていた文字やデザイン

ここでは、報道等の情報をもとにして、ジャンパーに記載されていたデザイン、ジャンパーが作成された経緯、ジャンパーの使用状況等に関する事実（と思われるもの）をまとめておきます。

画像については、
THE HUFFINGTON POST 「生活保護『なめんな』ジャンパーは
『構造的な問題』 小田原市に支援者ら申し入れ」
http://www.huffingtonpost.jp/2017/01/25/namenna-jumper_n_14361468.html

にて公表された資料を利用しました。

(1) ジャンパーに記載されていた文字と意味 (なるべく中立的な翻訳を採用)

・ ロゴマーク



HOGO NAMENNA (生活保護なめんな)
SHAT

(なんの略称であるかについては諸説あるが、朝日新聞報道による小田原市の説明では、S(生活)H(保護)A(悪撲滅)T(チーム)の略称であるとされる。)

※注 2017年2月3日23時25分朝日新聞デジタル

「小田原市職員、シャツにも文字『生活保護悪撲滅チーム』」

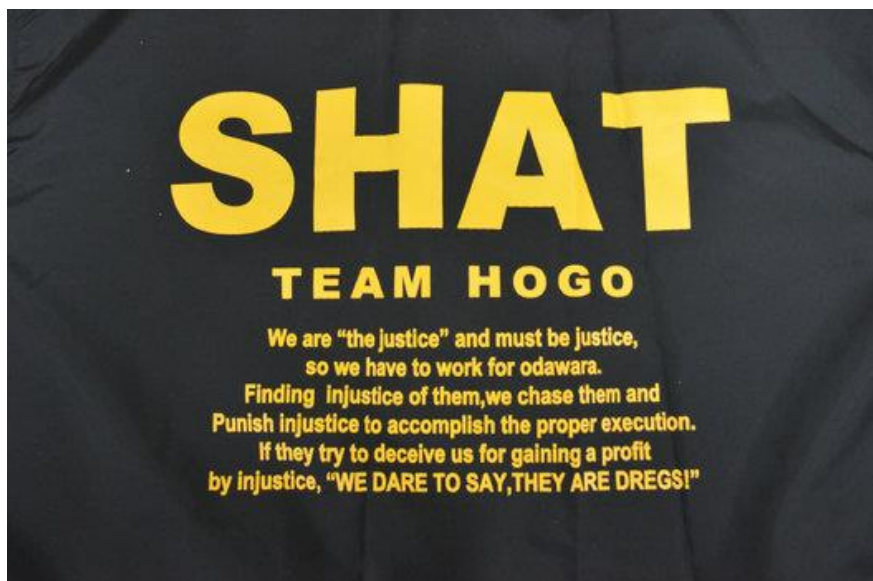
<http://www.asahi.com/articles/ASK236QBCK23ULOB01F.html>

「悪」の漢字に大きなバツ印

Eradication (撲滅)

EST-2007 (2007年設立)

・ジャンパー背面部分の文章



SHAT

TEAM HOGO

We are “the justice” and must be justice, so we have to work for odawara.

Finding injustice of them, we chase them and Punish injustice to accomplish the proper execution.

If they try to deceive us for gaining a profit by injustice ” WE DARE TO SAY, THEY ARE DRESH!”

（私たちは正義であり、正義でなければならぬ。なぜなら、私たちは小田原のために働いているからである。

彼らの不正を暴くため、私たちは彼らを追及し、適切な処罰を成し遂げるために不正を罰する。

彼らが、不正による利益を得ることによって私たちをだまそうとするのであれば、「あえて言おう、カスである」と」

（２）ジャンパーが作成された経緯等

・ジャンパーが作成されたのは、２００７年に生活保護の支給を打ち切られた男性が市役所でカッターナイフを持ち出し、職員を切りつけた、という事件が１つの要因となっている。

・事件後、当時の担当課長の発案でジャンパーを作るアイデアが出され、ジャンパーを作成することとした。

・自分たちの自尊心を高揚させ、疲労感や閉塞感を打破するための表現を採用した。

・ジャンパーは職員それぞれが自費で作成していた。

3. ジャンパー着用を肯定的にとらえる意見について

ジャンパーの着用を肯定的にとらえる意見として、主要なものは以下のようなものです。

①ジャンパーが言うのは、不正行為を断固として許さない、というものであり、行政として、厳しくチェックして取り締まるのは当たり前のこと。

②主張している内容には何ら問題がない。

③正当な受給者に直接圧力をかけたわけでもないのに、何故ここまで問題となるのかわからない。

④ケースワーカーの抱えている案件数や仕事量、ストレス等を考えれば、そんなジャンパーを着たくもなるという心情はうなずける。

⑤新聞報道等にいわれるように、職員達に「生活困窮者を支えようという感覚が欠如」していたのではなく、ジャンパー着用は、あくまでも不正受給者への態度の発現である。生活保護制度の真の勝ちを実現するために当該職員は努力している。

⑥上司が「作ろう」と発案したジャンパーについて、部下が反対することは難しい。

4. どのように考えるべきか

(1) ジャンパー着用肯定論を受けて

前項で、可能な限り幅広く、ジャンパー着用肯定論を挙げてみました。

ざっと見る限り、それぞれの意見はどれも全く説得的ではありません（特に⑥。）。「ジャンパーを着用して市職員・ケースワーカーとしての職務にあたることは是か非か」というテーマで表層的なディベート合戦を行うのであれば、おそらくジャンパー着用否定論チームの圧勝に終わるのではなかろうかと思います。

ただ、肯定論の中でも、目を背けてはいけない重要なテーマが隠れているように思います。それは、不正受給の問題と、ケースワーカーの負担の増大、という2点です。以下では、この2点も踏まえたくて、それ以外の問題についても、情報を記載しつつ、色々と考えてみたいと思います。

（２）不正受給の問題

ジャンパー着用の問題から、生活保護の不正受給の問題をどう考えるか、ということを考える必要が出てきたように思います。

様々などころで言われていることですが、生活保護の不正受給は2%、金額としては0.5%、という数字があります。生活保護費全体が約3兆7000億円であることから、不正受給の総額は約173億円ということが公表されています。もちろん、「173億円」という金額

そのものは看過することができない数字ですが、生活保護を不正に受給している者の割合は、生活保護受給者全体のうち、ごくわずかにしか過ぎません。

ジャンパー問題に目を戻します。不正受給を許さない、という態度や決意を表明することは、問題ないのかもしれませんが。しかし、ロゴや文言は、明らかに過激です。また、本来的に保護を受けるべき状況で生活している人が、生活保護を受けることが出来ていない、という問題がまずあることに、目を向けるべきであると思います。

そのような文言、ロゴがプリントされたジャンパーを着用できる、ということと、「生活保護を受給する人は不正をするものだ（不正をする傾向にあるのだ）」という思考や考え方とは、かなり親和性が高いのではないかと思います。何となく、市職員が、単に不正受給を許さないという決意表明を超えて、多少なりとも歪んだ視点でもって、窓口対応、案件対応を行っていたのではないかと、少し不安な気持ちになります。

（発覚した不正受給の件数を元にした数字をベースにしているものの）先の数字から見れば、窓口を訪れる大多数の人が、不正受給をしたいと考えている訳では無いと思います。

(3) ジャンパーが作成された「2007年」という時期

ジャンパーが作成されたのは、2007年であるとされています。ジャンパーを作成する原因となった傷害事件は、2007年の7月に発生した事件のようですので、その7月以降に、ジャンパーが作成されたのであろうと思います。

2007年の前年である2006年には、福岡県北九州市の門司区で、立て続けに餓死者が出てしまったことで有名な年です。そして何より、2007年7月は、生活保護を打ち切られた元タクシー運転手が、「おにぎり食べたい」と日記に書き残して餓死した事件が発生した時期でもあります。

つまり、2007年7月以降というのは、生活保護を打ち切ることや生活保護窓口での対応における問題について、世間的にもクローズアップされていた時期であったということです。

生活保護の受給打ち切りや、窓口での水際作戦が「人の死」につながる、という衝撃が、生活保護窓口担当者やケースワーカーの間を走ったであろうことは想像に難しくありません。そのような状況の中で、彼らがすべきこと、取り組まなければならないことは、「生活保護なめんな」と英語で記載したジャンパーを着用して職務に当たることだったのでしょうか。

(4) ケースワーカーについて ～負担の増大と根本的な制度上の問題～

ア

最後に、ケースワーカーの負担が増大している、という点について考えてみたいと思います。現在、1人のケースワーカーが抱えている件数は、80件とも100件以上ともいわれています。1件というのは、1世帯という意味ですから、このような件数について、1人で完璧に対応をしつづけることは難しいと思われれます。

小田原市の職員が問題のジャンパーを着用するようになったきっかけが、生活保護の支給を打ち切られた男性がカッターナイフで市職員を切りつけた、という事件であったということについては、先に少しだけ触れました。この支給打ち切りの理由については、以下のように記載されている記事がありましたので、引用します。「生活保護が打ち切られたのは、この男性が最後に保護費を受け取ったあとに住所不定になり、受給要件を失ったためだ。市はこの男性に「住所がなくなると保護費の受給ができなくなる」と電話や面談で4回説明し、市でアパートを用意したが、指定の日に来ず連絡が取れなくなったという。それで生活保護費の廃止措置が取られた。」(「生活保護「なめんな」ジャンパー問題 決定的にかけていた小田原市の視点」

<http://news.livedoor.com/article/detail/12574140/>)

細かい事実経緯や、ケースワーカー達の対応、連絡の仕方の適切さ等について、このような報道資料によっては、ハッキリとしたことは言えませんが、小田原市の職員としては、その当時できる限りの対応を行っている、ということもいえるようには思われます。

沢山の件数を抱えながら、それぞれができる限りの対応を行っているにも関わらず、カッターナイフで切り付けられる、という事件が起きてしまったという状況であれば、確かに職場のテンションは下がるでしょうし、暗いムードが漂い始めていた可能性もあるように思います。

イ

そもそも、ケースワーカーは、「福祉の専門家」であるべき存在です。しかし、現状では、ケースワーカーのほとんどは、必ずしも十分な研修や国家資格等を有する専門職の方ではありません。ケースワーカーの雇用の増大や改善がなされることと同時に、ケースワーカー資格の在り方や、雇用の方法等について、見直しが図られるべきと思います。

ほとんどのケースワーカーが福祉の専門家ではない現状では、ケースワーカーと生活保護受給者との間で適切なコミュニケーションが不足し、結果として、先に触れたような痛ましい事件が発生してしまうのではないかと思います。すなわち、人数的にも、対応能力的にも、現

状の生活保護行政の状態は、非常に問題がある、といえる状況なのです。

小田原市の職員に限らず、ケースワーカーの人数が慢性的に不足しており、業務が多忙を極めているという状況を考えると、職場において一体感を高めるため、士気を高めるための一定の方策を取りたいとケースワーカーが考えることは頷けます。ただ、過激な文言が記載されたジャンパーを自費で制作して着用することによってではなく、ケースワーカーの雇用増大・待遇の改善等を職員が一致して求めることによって、彼らの一体感が高められることの方が、根本的な問題の改善につながり、より望ましいようには思われるところです。

(5) ジャンパーだけではなかったグッズ

小田原市の職員が制作していたのは、ジャンパーだけではなく、という報道があります。ジャンパーだけでなく、Tシャツ、ポロシャツ、ボールペン、マウスパッド、マグカップ、ストラップ等、8種類のグッズが作られていた、とのことでした。

ジャンパーの着用により士気を高める、一体感を高めることで、現場にあふれる悲壮感を打破したい、ということがジャンパー着用の始まった理由であったためにジャンパー着用肯定論に傾いていた人も、複数のグッズが作られていたことを見ると、その依るべき論拠が危ぶま

れるように思われます。ここまできると、大学のサークルのような、「遊び」の要素が多く含まれてくるように感じます。

5 まとめ

色々な事情を踏まえて思考を巡らせてみましたが、ジャンパー問題の裏にあるもっと本質的な問題に踏み込むことができたかということ、そうでもないように思います。もう少し本質的な議論ができるようになりたいと思いますが、今の私にはこの辺りが限界のようです。

とても個人的なまとめとなりますが、ジャンパー問題を通して、思考を巡らせることが、多少なりともできたように思います。

ジャンパー問題が、ケースワーカーけしからん、という単なる炎上・祭りに留まることないように願います。

7. それぞれの感想

本当に大切なことを言葉にするのは難しい。

梅澤昌子

夜回りに関して、昨年よく考えていたのは、「ひとりではなく、仲間活動できることのありがたさ」だった。仕事で行った先のバンコクで、難民の問題に否応なしに向き合わざるを得なくなり（というと、なんかすごくカッコイイみたいだけど、単に、勤務先が国連で、さらにいろんなたまたまが重なって、UNHCR の人の話を聞いたり、難民の人たちと出会う機会があったからだけなのだけど）、その重さを不器用に一人で抱え込み、結果、ほとんど何もしないうちから精神的に参ってしまった。夜になると涙が止まらなくなり、眠れない。震災後の釜石でもパレスチナの難民キャンプでもそんな風にはならなかったのに。自分が壊れてしまいそうで、怖かった。そして、そういう眠れない晩に、よく、夜回りグループのことを思い出していた。

と、というようなことを報告書に書きたかったのだけど、うまく書けなかった。それでかわりに、日本に戻って初めて参加した夜回り活動でマンガを借りた話などを書いた。あの晩、わたしはようやく「大丈夫、こういう支援活動をして、自分は壊れたりしない」と、なんだかすごく安心

したんだけど、そのときのこともやっぱりうまく言えないし、そもそもあまり人に話したこともない。自分にとってはとても大切なことなのだけれども。口ごもってないで、もっとちゃんと言えるようになりたい。時間をかけても、丁寧に考えること。ぴったり、とまではいかななくても、自分の考えに近い言葉をさがすこと。社会の問題に、良い意味で、慣れないこと。そんなことの大切さに気づかせてくれる夜回りの仲間たちに、普段は照れてなかなか口にできない「ありがとう」を言いたい。

思いやりと上から目線

金本 美子

野宿の方で、「同じところにいると、近所から苦情が出て、警察の人が、(野宿の方に)立ち退くように言いに来ないといけなくなって、悪いから」とのことで、移動しながら野宿をしている方がいます。未だに、「近所からの苦情」とはどんなものなのか分かりません。夜回りに参加を始めたころは、「近所からの苦情」に、排除などの悪意しか感じられませんでした。最近、もしかしたら、「家がないなんて可哀想」「飢えていないだろうか?」「こんなに寒いのに、凍死しないだろうか?」と心配し、警察に助けてあげてほしいと通報があるのではないか?と思うようになりました。

野宿の方の、「悪いから」という言葉に、警察の方も、悪意をもって、追い立てをしているのではないのだろうと思うようになりました。

しかし、悪意は感じられなくても、野宿をせざるをえない方が、実際に追い立てられて、移動しながらの生活を余儀なくされています。とりあえず、相手の立場になって考えるのは、大事な事だけれど、「自分は、野宿に耐えられないから、野宿をされている方は可哀想だ」とか、「自分は、家屋で生活していて幸せだから、野宿の人は不幸だ」とか、相手が可哀想だとか不幸だとか、上から目線で勝手に決めつけないように気をつけていきたいと思います。

記憶

中村 祥規

「夜回り準備会」の活動に参加したのが2007年なので、ちょうど今年で10年になります。といっても、ここ数年は、年に数回参加するのがやっとで、役に立っているのか、足を引っ張っているのか、よくわからない状態になってしまっています（この原稿も、締め切りを過ぎて書いてます。編集メンバーの皆さん、すみません）。訪問先の人の近況にも縁遠くなってしまって、ドライバーが足りない時のピンチヒッター、というのが最近の私の状況です。

最近の夜回りは訪問先も減っていることもあり、たまに参加すると、はじめて来たころのことをよく思い出します。「昔、〇〇さんがいた」というところがあちこちにあります。動物を飼っていた人、整理整頓が几帳面だった人、保護を受けてアパートに移った人、いつの間にか行方が分からなくなった人など、何人かの人、エピソードとともにその人の人となりがよく思い出されます。

もっとも、そこにいたことは覚えているのに、どんな人だったのか、いつごろいなくなったのか、記憶があいまいになっている人も少なくありません。当時は定期的に話を聞いていたのに、人間の記憶もいい加減なものだなど思います。

人がいなくなったところは、さっそくフェンスなどで囲われて、そこに人がいた気配すら感じらないところがほとんどです。そんな跡を見ると、そこで暮らすことの難しさをあらためて痛感します。

実際に野宿で暮らす人にとって、ある一時期を野宿で過ごしたことは、あえて覚えておきたい記憶ではないかもしれませんが、何もなかったかようになってしまうのも、何か惜しいような気がします。野宿の暮らしを離れた人が、当時のことをどう振り返っているのか、機会があれば聞いてみたいなと思います。

その人の庭

鍋谷 美子

夜回りの中で、相談の仕事の中で、すごく面白いことがある。その人の話をもっともっと聞いてみたいと思うような、大笑いしてしまうような話がずっと続くことがある。

生まれ育ち、一人ひとりのバックグラウンドがあまりに違うこと、そうしてその人の生活、価値観、人生が成り立ってきたこと。その中には奪われたり、抑圧されたり、酷い目に遭ったこともたくさん。

でも、そりゃもちろんその人の人生全てが「辛く苦しいストーリー」ではないわけで、その中にもなんというか、「面白い」と思えることがあり、そしてその話は、その人の「庭」での話だなあ、と思う。だから現状を肯定していいというふうになるのはもちろん有害で、そうならないよう、細心の注意を払いたいが、その人が、一方的にただ力を奪われた弱者なんかではなく、そこを力強く生きてきた人で、それまでもこれからその人の人生なんだということは、何度も確認しておきたいと思う。

その人の庭で、遊ばせてもらうことが、自分にもすごく力になることがある。この人はどんな庭を持ってるのだろうかと、ときどきしながら人に出会いたいと思う。

夜回りは解決じゃない

野々村 耀

「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」という言葉をきいたことがあります。(物事は広い視野の中で考えないととらえられない。また現実には具体的に・個別に取り組む必要がある、ということでしょうか。そういえば、ある人が「全人類を愛しているという人が、隣の人のがにくくて仕方がない」という皮肉を言っていました。) 広く、狭く、そのどちらもが必要だと思います。

何度か、食うものがなくなった人が万引きして、裁判の証人になったことがあります。弁護士や裁判官に、野宿せざるを得ないこの社会の状況を深く理解してほしいと思って証言しようと思うのですが、なかなか理解されない。刑が軽くなればいい、実刑にならなければ、執行猶予がつけばいいというような弁護が多い。もっと裁判官が事件を通して、なぜ野宿しなければならない人がでてしまうのか、野宿している人がどんな困難に直面するか考え、社会に対して訴えるような判決を書いてもらいたいと思うのですが、なかなかそういう証言を引き出してもらえないのが実状です。

しかし、最近イタリアで、何も食べるものがないときに、少しの食べ物を盗むのは犯罪ではないという、判決がでた

と聞きます。

昨今、子供の貧困が問題になっています。大事な問題ですが、子供が貧困なのは、家族が貧困だからなのにそちらは問題になりにくい。なぜかというと大人が貧しいのは自己責任とされる、子供なら自己責任といえないから、訴えやすい、聞かれやすいからのようです。このようにして肝心なことは避けられてしまう。だから、公認の弱者になると支援され、そうでないと切り捨てられるというひずみがなくならない。

夜回りは、野宿している人を支援するささやかな活動です。無意味だとは思っていませんが、人が野宿に追いやられる問題の根本的な解決とはほど遠いのも事実です。しかし、実際に暮らしぶりや人柄にふれながら、何が問題なのか気づかせられ、気づいたことを、多くの人と一緒に考えられたらと思うのです。夜回りは活動の半分、社会に訴えることが半分・・・そのための報告書だと思って作ってきました。

2016年のリオ・オリンピックはひどいものだった。ブラジルの人権団体によると2万2059世帯、7万7206人が住み慣れた土地を追われた。強制排除に遭ったのは、ファベエラと呼ばれる貧困層が住むエリアで、家屋は破壊されて更地となり、オリンピックパークが出来た。かろうじて残ったファベエラはオリンピックの看板で囲われ、中心には軍警施設ができ、銃を構えた治安部隊がニラミを利かす。

東京オリンピックも、リオほど大規模ではないが、貧しい人が追い立てられています。社会保障費は切り詰められ、厳しくなろうとしている。それなのに、都市の空間は野宿しにくい・できないようにデザインされています。公園などの屋外では寝られないから、見えない場所に追いやられる、不可視化された貧困がこれからの課題になるだろうと予想しています。多くの人が考えないと解決は見えないでしょう。

活動について話すこと

森脇 梓

2016年の報告書はメンバーが忙しかったこともあり、例年よりコンパクトなサイズになったが、そのおかげで手に取りやすく、人に渡しやすいものになった。せっかく作ったのだから、いろいろな人に読んでもらおうと思い、家族や友人に渡した。

渡す前は、活動のことをどう説明すればいいだろうか、「重い」と避けられないだろうかと不安だった。しかし、報告書を受け取ってくれた人はみんな、夜回りの活動に興味を示し、私の話真剣に耳を傾けてくれた。「そんなことしているんだ、すごい」「大事な活動だね」と肯定的な反応をもらい、うれしかった。きっかけさえあれば、このような活動に関心を抱く人は潜在的にいるのだろう。こういっ

た層にどうアプローチするかが今後の課題である。私は普段から自分のことを積極的に話す方ではないが、自分の意志で取り組んでいる活動を人に知ってもらうのは大事なことだと思った。もっと、どんどん話していこうと決めた。

8. 会計報告 カンパ御礼

*2015年度会計報告(2015年4月1日～2016年3月31日)

項目	金額(円)	備考
収入		
寄付金	267,000	45件
助成金	115,000	NHK 歳末助け合い義援金(9万円)、ボランティア基金(2万5千円)
合計	382,000	
支出		
車両費	19,600	燃料費
物品費	77,510	炊出し食材費(越冬)、下着、蚊取り線香、カイロ、医薬品、コーヒー等
印刷製本費	69,150	活動報告書印刷費
通信費	17,057	報告書発送費、振込み手数料
支払寄付金	30,000	神戸冬の家・越冬越冬活動に協賛
管理費	175,117	分室維持管理・人件費
合計	382,000	

* 寄附・寄贈報告

(自：2016年3月1日 至：2017年2月28日 敬称略)

東昌宏 岩崎滋 小倉覚 加勢本藍 片山恵 川辺比呂子
桐田泰江 下川潤 武田多美 鄭秀珠・下田隆清・由楽
鶴崎祥子 田平正子 内藤進夫 中島紀子 長澤毅
西島明子 二宮百合子 西山秀樹 野々村耀 東根順子
堀泰雄 牧野哲 正木紀通 三島孝子 宮地京子
森崎武雄 山本容子 吉田英二 YWCA 分室リサイクルシ
ョップ「くるくる」

★多くの方からカンパ、毛布、衣類、靴などの物資、リンゴなどを頂きました。感謝して活動に使わせていただきました。第4土曜の夜回り前に美味しいおにぎりを握ってくれている、山本容子さん、宮地京子さん、いつもありがとうございます。

万一、お名前の漏れや間違いがありましたら、ご一報いただけるとありがたいです。



※今号の報告書は、「28年度NHK歳末助け合い義援金」の助成を受けて作成致しました。

神戸YWCA夜回り準備会（仮）活動報告書 vol.12

2017年3月31日発行

編集 金本美子・立川献・鍋谷美子・野々村耀・森脇梓・梅澤昌子

発行 神戸YWCA夜回り準備会（仮）

【神戸YWCA本館】

〒651-0093 神戸市中央区二宮町1-12-10

TEL 078-231-6201 FAX 078-231-6692

【神戸YWCA分室】

〒651-0062 神戸市中央区坂口通5-2-16

電話 FAX 078-221-5111

【E-Mail】 yomawari@kobe.ywca.or.jp

【URL】 <http://www.kobe.ywca.or.jp/top/activities/regional/yomawari/>

【郵便振替】 01100-0-10298 公益財団法人神戸YWCA

【銀行口座】 三井住友銀行三宮支店（普）1015232

公益財団法人神戸YWCA

「参加者募集しています！」夜回りや病院訪問などにご参加いただける方は、上記連絡先までご連絡下さい。